

水俣病検診終わる

熊大第二次研究班

来年三月ごろ結論



健康診断を受ける水俣市の市民たち

「一百から続けられていた熊本大、熊本県研究班の水俣市での水俣病検診が十二日で終わった。アンケート調査では二〇〇名を聞き、健康診断では月浦、出口、湯島地区三百六十九人のうち約七百人が受けた。今後随時水俣市を助ける二〇〇名を診察を予定させる。結論は来年三月ごろに予定されているが「水俣病を常態化しただけに、水俣病症状を訴えた人たちが多かった」と研究班では言っており、その結果が注目される。

多い症状の訴え

水俣市 三地区で700人が受診

検診日の十二日は男児、生徒を対象としたが、前日まで作業のつごうなどで受診出来なかった人たちがも助れた。特に湯島地区の受診率は高く、湯島に転居して間もない家庭を除いてほぼ全世帯が受診し、最終的には三地区全体で約七百人となった。

このうち水俣病の疑いが持たれる人たちがどれだけのかが最終的に健康診断を受けるが、検診

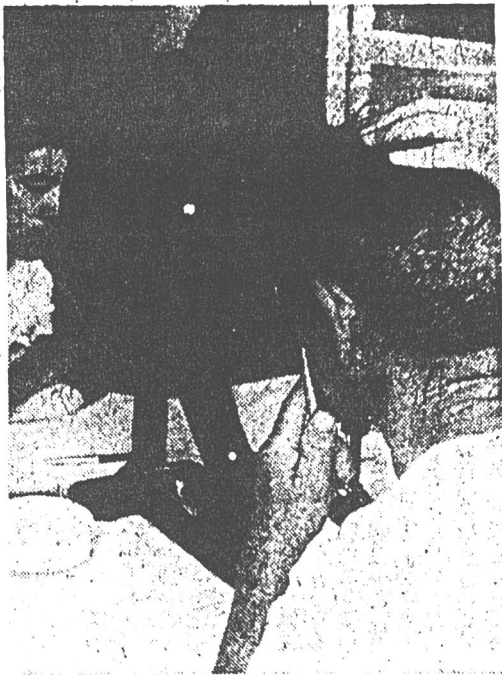
検診日(十二日)は男児、生徒を対象としたが、前日まで作業のつごうなどで受診出来なかった人たちがも助れた。特に湯島地区の受診率は高く、湯島に転居して間もない家庭を除いてほぼ全世帯が受診し、最終的には三地区全体で約七百人となった。

このうち水俣病の疑いが持たれる人たちがどれだけのかが最終的に健康診断を受けるが、検診

「衛生学」は「全般的な調査」として、水俣病の多発地区だけに前回調査の御所浦町に比べて水俣病症状を訴えた人が多くなったと告げません。住民の方に非難を覚悟してもらったので、これに代えるためにも出来るだけ早く結論を出す必要はない。結論は来年三月ごろには出ると見ると語った。今後、この調査を船大に持

ち帰る多数派で検診を加え、さらに精密検査を受ける人たちの割合は上がる作業が進められる。原田正純講師(精神科)も研究班の一員として連日診察にあたっていたが、今回の検診とは別にすでに患者家族の周辺について調査しており、これまで水俣市を中心に二百五十人のカルテを保存している。同講師の話では「患者家族の七〇割ほどが疑わしい」とのこと

で、今回の調査でも相当数の疑わしい人がヒツシツツされることになり、すでに公害被害者認定審査会には今回調査の三地区を含めて百人以上の人が入ります。水俣病認定問題をめぐって、一方、審査会のメンバーの一人、立正正副教授(精神科)も検診に当たっていたが「足元がふらふらして船から海に落ち込んで、健康診断に転るとし



視野狭く検査を受ける市民

込みするケースがある。われわれが大学病院に引っ込んでいて限られた患者だけを見ていてはどんな病状だって全体像を見失う。水俣病に限ってはありもしない症状を大げさに訴える例などないと思う。むしろその逆。実態をはっきりつかみ、そのうえで対策を立てるべきだ。この動きを防ぎ止めようなんてことは大海の水を止めようとするのと同じで、出来るものではない」と締めくくった。